Kansai Nikikai Opera

Oct.2024

㊤㊦ 第97回オペラ公演「カルメン」(2023年11月)撮影:早川壽雄

Contents

2.3 関西二期会　創設 60 年のあゆみ
4.5 『こうもり』作品解説
6.7 指揮者・演出家が語る『こうもり』
8 落語家 桂春蝶さん　フロッシュ役で登場！
9 キャストインタビュー
10-13 コンサートレビュー
第 97 回オペラ公演『カルメン』
『関西二期会 創設 60 周年記念 オペラ・ガラ・コンサート』
『2024 想い出のあの歌～時代を彩る名曲たち～』
第 21 回サロンオペラ『ディドとエネアス』
14 谷やんの企画・制作デイリーライフ
15 舞台を支える裏方さん / 賛助会員
16 新人会員の紹介

公益社団法人 関西二期会
KANSAI NIKIKAI OPERA

関西二期会
創設60年のあゆみ

1968（昭和 43）年、大阪毎日ホールで上演された第１回オペラ公演「カルメン」。
第１回オペラ公演から約１５年に渡り、舞台美術の妹尾河童が道具帳（背景画）を手書きで描いた。

舞台に息づく“人間ドラマ”

終戦から19年が経った1964（昭和39）年、『二期会関西支部』（現関西二期会）は発足した。東京オリンピック開催に向けて東海道新幹線が開業し、東京-大阪間の移動時間が短縮された時代である。水谷堅と木川田誠が『二期会』（以後、東京二期会）の立役者である柴田睦陸、中山悌一らに関西での音楽活動について相談したところ、「二期会関西支部」の創設を示唆され、実現に至った。柴田氏や中山氏は関西の相愛女子大学や武庫川女子大学で指導者として迎えられており、地元の声楽家との交流が深まっていた。東京藝術大学時代に柴田氏に師事していた米田哲二（現理事長）は、「柴田先生は人柄が素晴らしく、包容力のある接し方で指導してくれました。人間的にお手本にしていた方でした」と目を細める。当初は会員17名、準会員27名で結成され、事務所は本町の河合楽器が入っていたビルの一室を無料で借りた。

一流の指導者たちに育まれて

創設当初から東西の一流の指導者らが集まり『二期会関西支部』が演奏団体として成長した。その中で大黒柱となった一人である演出家の栗山昌良は、第1回オペラ公演《カルメン》から45年間に渡り数多くの作品を手掛ける。第1回オペラ公演のミカエラ役で出演した門屋菊子（現名誉理事）は「『ミカエラ!登場の仕方が遅い!』と、栗山先生に歌う前から怒鳴られるの。とにかく怖かった」と振り返る。斉藤言子（現副理事長）も、第57回オペラ公演《天守物語》で天守夫人・富姫を演じた時、「正座からスクッと立つために、2時間正座をするという厳しい稽古がありました。ゲネプロ（リハーサル）終了後に、『言子ほめてやるぜ』と栗山先生から言われた時、その一言で泣き崩れました」と語る。

他にも東京二期会を中心に合唱活動で活躍し、相愛女子大学で講師を務めていた指揮者の大森榮一の功績も大きく、1970（昭和45）年から始まった室内オペラシリーズを手掛けた。門屋菊子は「大森先生が『門屋さんに合うと思う

よ』と、《電話》という作品を紹介して下さいました。恋人をほったらかしにして、友人との電話に夢中になる役で、私によく似ている役でした」。この室内オペラシリーズでは、大森氏が選び抜いた国内外の知られざる名作を取り上げ、グランドオペラに出演する前の若い声楽家たちにとって勉強の場となった。

写真㊦ 1972（昭和 47）年、大阪厚生年金会館中ホールで上演された室内オペラシリーズⅡ「電話」。ルーシ役の門屋菊子（左）とペン役の蔵田裕行。

関西ならではの熱いエネルギー

オペラ公演と並行し、声楽家を育てるための研究活動にも力は注がれた。清水光彦（元理事）は、研究生の頃に教わった狂言役者の茂山千之丞の所作について熱く語る。「扇子を持って飛び上がると同時に、ストーンと胡坐をかいて扇子を開きながら座る姿は今でも忘れられない。先生の指導は、自分にとって後ほどの人生の財産になりました」。

人との出会いは、未知なる未来を切り開いていく。第2回オペラ公演《フィガロの結婚》のケルビーノ役で初めてオペラの舞台に立った仁禮義子は、中山悌一の推薦で東京二期会の公演へ招かれ、彗星のようなデビューを果たした。「中山先生からは『先輩たちの真似をしないように』と約束をさせられました。東京は大阪に比べて声楽家の人数が多く、凄い方もいらっしゃった。でも当時は大阪万博もあり、我々は創設してから7年目で生き生きとしていたのではないでしょうか」と話す。これから羽ばたいていく関西ならではの熱いエネルギーを、指導者たちは肌で感じていたのだろう。

瞬く間に演奏団体として成長し、創設後10～15年には立て続けに賞を受賞。1979（昭和54）年には、『関西二期会』と名称を改め、事務所を大阪市西区の土佐堀へ移し、公演を重ねる度に声楽家たちの経験は豊かになっていく。

斉藤言子は、第64回オペラ公演《ノルマ》のタイトルロールを演じた時、忘れられない体験をしたと言う。「精神が肉体から離れて、歌の神様と一緒に天井桟敷から自分の舞台を見ている気がしました。何十年もの積み重ねなのかもしれませんが、あのような不思議な体験は後にも先にも一度きりです」。2011（平成23）年に大阪市中央区の現住所に事務所を構え、公益社団法人関西二期会と改名した。

写真㊧ 2006（平成 18）年、アルカイックホールで上演された第 64 回オペラ公演「ノルマ」。写真中央はノルマ役の斉藤言子。

長年続く 企画演奏会

オペラ公演以外に、企画演奏会も創設時から開催されている。山田耕筰からの依頼で始まった《山田耕筰想い出のしらべ》（全13回）、《フランス・ドイツ・日本・イタリア歌曲の流れ》は現在に至るまで30年以上続いており、出演者たちは公演監督の指導による稽古を重ねて本番に臨み、学びの場となっている。出演者とお客様との交流も深まり、懐かしい歌を届ける演奏会《想い出のあの歌》シリーズに25年以上来場しているファンの前田良子さんは、「これがわたしの生きがいですねん」と話す。時代を超え、様々な“人間ドラマ”が交差して舞台は息づいているのだ。

今年は60周年を記念して、中山悌一が日本語訳詞した喜歌劇《こうもり》を上演する。シャンパングラスを片手に、先人たちも乾杯の歌を歌ってくれるだろう。

（文・金子真由）